血と涙と

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
血と涙と

【Ｎコード】
Ｎ６６７２Ｍ

【作者名】
るうね

【あらすじ】
伊東が深手を負ったという報に、藤堂平助は笑みを浮かべた……。

伊東が七条油小路で何者かに襲撃され、深手を負ったという報が入ったのは、慶応三年（一八六七年）十一月十八日の深夜のことだった。

罠だ。

藤堂は看破した。

伊東を助けようとやって来た御陵衛士（ごりょうえじ）たちを、一網打尽にする策。おそらく、もう伊東は生きていまい。

それが分かっていながら、藤堂は油小路へ向かうことを強く主張した。同じ御陵衛士の服部武雄などは、新撰組が待ち伏せしているに違いない、もう少し事態がはっきりしてから動くべきだ、と出動には消極的だったが、藤堂は伊東先生を見殺しにするのか、と強引に自論を押し通した。千載一遇の好機なのだ。

藤堂たち七人は駕籠で油小路へ向かった。伊東が負傷しているにしろ、死んでいるにしろ、その身体を収容するための駕籠は必要である。

これで、戦える。

藤堂は笑みを浮かべていた。

新撰組と、あの試衛館の面々と。戦えるのだ、真剣で。竹刀や木刀では何度も試合ったことはある。その度に、物足りなさを覚えたものだ。真剣で、死合いたかった。近藤と、土方と、沖田と、山南と、永倉と、原田と。敗北は死。そんな戦いをしてみたかった。そのためにこそ、新撰組と袂を分かち、分派した御陵衛士側に身を置くことにしたのである。

剣。それが、藤堂にとっては全てだった。己自身、と言ってもいい。伊勢国津藩主、「藤堂高猷（とうどうたかゆき）のご落胤」という肩書き。そのために、よく人から持て囃（はや）された。

苦痛だった。

人が持て囃すのは、藤堂の肩書きである。とすれば、自分は何なのか。「藤堂平助」という個人は。

そんなもやもやを晴らしてくれたのが、剣だった。剣には、肩書きなど関係ない。ただ、強い弱いがあるだけだ。猛稽古をして手に入れた強さは、「藤堂高猷のご落胤」ではなく、まぎれもなく「藤堂平助」という個人のものだった。その強さを試すために京に来たと言っても、過言ではない。

市中見廻りでも常に先頭を歩き、池田屋の時も最初に斬り込んでいった。そうした行状から、いつしか魁先生（さきがけせんせい）という二つ名で呼ばれるようになり、八番隊組長にもなった。全ては、自分の強さを確かめるため。

だが、すぐに物足りなくなった。ほとんどの不逞浪士たちは、剣術をかじったことがある、という程度の腕でしかなかったし、たまに強い者がいても、新撰組は集団で押し包んで斬ってしまう。一対一の戦いなど、望むべくもない。自然、藤堂の心の矛先は、新撰組内部へ向かうことになった。新撰組には、一騎当千の猛者が何人もいる。藤堂にとっては、まさしく垂涎であった。彼らを相手に、自らの強さを試したい。たとえ、それで死んだとしても本望である。むろん、負けるつもりなど毛すじほどもなかったが。

油小路に着いた。遠目で、伊東が倒れているのを確認する。ぴくりともしていない。やはり、死んでいるのだろう。

藤堂にとっては、どうでもいいことだった。周囲の気配を探る。巧妙に隠してはいるが、それでも複数の視線、息遣いを感じた。思わず、頬が緩む。

駕籠かきを帰し、藤堂たちは駕籠を担いで、伊東へ近づいていった。死んでいた。その亡骸を駕籠に乗せようとした時、一斉に周囲から人が湧いた。新撰組。藤堂は嬉々として、刀を抜いた。

乱戦になる。雑魚は他の者に任せ、藤堂は幹部の顔を探した。

いた。永倉と原田。彼らも、こちらに気付く。無言で、一太刀浴びせた。永倉が大きく跳び退り、刀を抜く。原田も、槍の穂先をこ

ちらに向けてくる。
これだ。
藤堂は感無量だった。
自分が求めていたのは、これだ。負ければ死ぬ、という緊張感。本当の意味で、自分の強さを確かめられる場。
藤堂が永倉に突っ込んでいく。藤堂が振り下ろした刀を、永倉が自分の刀で受けた。つばぜり合いの形になる。永倉が口を開いた。
……？
思わず、藤堂は跳び退った。言われたことの意味が分からなかった。今、永倉は何と言った？
に
げ
ろ
逃げろ、と。たしかに、そう言った。情けをかけられたのだ。
かっ、と頬を紅潮させ、藤堂は激しく永倉を斬り立てた。それでも永倉は反撃してこない。払い、受け、外すだけ。原田も、じっと傍観しているばかりだ。
これでは意味がない。
藤堂は歯ぎしりした。
本気で死合うどころか、永倉たちは自分を逃がそうとしている。試衛館以来の同志としての情け。藤堂にとっては、無用どころか邪魔なものである。
こうなれば、永倉と原田、どちらかを斬り伏せ、もう一方を本気にさせるしかない。
そう思い定め、藤堂は一歩、足を踏み出す――突如として、背中に灼熱が奔(はし)った。
驚いて、後ろを振り向く。一人の新撰組隊士が、血に濡れた刀を持って、立っていた。見たことのない顔だった。
その隊士が、袈裟掛けに藤堂へ斬りつけた。血飛沫(ちしぶき)が、辺りを赤く染める。藤堂の視界が、明滅を繰り返した。

馬鹿な。
藤堂は愕然とする。
これが、こんなものが俺の死だというのか。
認めない。たとえ死ぬにしても、それは永倉や原田のような猛者との、肌のひりつくような真剣勝負の末であるべきだ。こんな名も知らぬ男の手にかかって死ぬなど、そんなことがあっていいはずがない。いいはずがないのだ。
地に沈み込むような感覚。気付くと、藤堂は地に倒れ伏していた。誰かに抱きかかえられている。永倉だ。涙を流していた。
違う。
藤堂は歯噛みする。
俺が欲していたのは涙ではなく、血。血で血を洗う死闘をこそ、求めていたのに。こんな温い涙などいらなかったのに。
全ての感覚が遠ざかっていく。藤堂の視界と意識は闇に呑まれ、そして消えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6672m/

血と涙と

2010年10月8日13時29分発行